パネル・セッション

現代中央アジアへの域外からの関与
――影響と課題――

＜趣旨説明＞

湯浅　剛

2016 年の研究大会では、前年秋頃から新免先生と相談し、中央アジアをめぐる国際関係について議論するパネルを設ける方向で登壇者の調整を進めた。

企画当初から、ソ連を構成した中央アジア諸国だけでなく、その南に位置するアフガニスタンなど、より広域の情勢を見据えた議論ができないか、と考えてきた。同国では 2014 年にガニ大統領とアブドゥラ行政長官との二頭政権が発足しつつも、政権の陣容はなかなか決まらないままであった。また、2001 年以降駐留していた米欧諸国軍も治安維持の役割を終え、アフガニスタン側に権限が委譲された一方、国内治安の悪化に歯止めがかかる様子も窺えない。アフガニスタン情勢の安定化は、地域安全保障にとっての最優先の課題であり続けている。このような状況を、隣国のパキスタンや地域大国としての中国などの視点を踏まえた議論ができないか、というのがモデレーターとして意図するところであった。

幸い、中国の政策については三船恵美氏、そしてパキスタン情勢と同国からのアプローチについては井上あえか氏という適任の専門家が登壇を引き受けてくれた。肝心の旧ソ連・中央アジアにおける実情については、数年来タシュケントを拠点に研究を続けている齋藤竜太氏が、専攻する水資源管理問題を軸に掘り下げた議論を提供してくれた。これら三者の報告に対し、稲垣文昭氏からは国境を越えた電力供給問題を含めたエネルギー情勢を中心に、また、清水学氏からは広域のユーラシア国際関係という視点から討論をお願いすることとした。

モデレーターの目論見は当たった、と考えている。当日は、会場からの反応を含め、「一帯一路」構想に象徴される中国からのアプローチに多くの質問が寄せられた。今大会でのパネル・セッションでは、外部勢力の立場からだけでなく、中央アジア域内の立場からも、各参加者から長年の研究にもとづく複合的な討論を行うことができた、と自負している。

（広島市立大学広島平和研究所）